

広島大学 高等教育研究開発センター 大学論集
第 39 集 (2007年度) 2008年 3 月発行：307-318

「優等学院」に対する教育学部生のイメージ調査と分析

北 垣 郁 雄 ・ 李 東 林 ・ 藤 井 宣 彰

「優等学院」に対する教育学部生のイメージ調査と分析

北 垣 郁 雄*
 李 東 林**
 藤 井 宣 彰***

1. はじめに

学業等で優秀な成績を修めた学生や入学時に高成績の学生を優遇しようとする制度がある。国際化の時代を迎え、優秀な学生に対してよい意味での競争心を持たせて学習のモチベーションを高めたり、世界的な研究大学を目指して学生の研究レベルを高めるためなど、各大学の目的に合わせての方策と見られる。我が国では、その優遇措置の一つとして優秀な学生に対し経済援助を行うようなことがある（広島大学 2007, 名古屋商科大学 2007, 日本工業大学 2007）。国によっては、そのような学生を登録させて特別な教育プログラムを実施するような教育組織を大学内に設置することもある。我が国には、そのような教育組織はまだほとんど見られないが（東北大学 2007）、国際的競争力のある人材育成が求められている中、この類の教育企画は早急の課題である（北垣・赤堀 2007）。

以上の考察の下に、本研究では、優秀と評価された学生に特化した学内教育組織を仮想的に設定し、日ごろ教育を専門とする教育学部生がどのような意識を有するかイメージ調査を行った。

本論文では、そのアンケートの内容と学生の回答の分析結果を述べ、イメージ構造を抽出し、考察を行うことを目的とする。本研究の結果は、今後、我が国で優秀な学生に対する特別措置を検討する際の基礎データになることが期待される。最優秀の人材の国際的な相互比較によっていわば国際力が評価されがちな現況において、大学の学生や教職員が「優等学院」に対して如何なる意識を有するか調査は、大学教育の将来ビジョンを定めるにあたっての重要な事柄である。本研究は、一国立大学における特定学部生の調査にとどまるものではあるが、未だその萌芽的段階にある我が国においては、今後継続されるべき一般性のある研究課題と思われる。

2. 研究の背景

我が国において、優等学院と称されるような教育組織の典型が未だ認知されていない現状では、イメージ調査の対象となる学生に対しては、何らかの教育モデルを提示しなければならない。しかしその前に、本研究で用いている優等学院という用語そのものについて、その背景を述べておく必

*広島大学高等教育研究開発センター教授

**広島大学高等教育研究開発センター研究支援員

***広島工業大学非常勤講師

要があるだろう。

アメリカでは、入学後、優秀な成績を修めていると判断された学生を極少数選別し、優遇措置を採ったり、特別な教育プログラムを与えて学習させる大学が多い。Digby (2005) は、590程度の大学をリストアップし、そこでの優等的措置を個別に概説している。そのうち、約100校では、その教育組織をHonors Collegeと呼び、それ以外ではHonors Programと呼んでいる。アメリカのHonors College等の調査にあたっているNational Collegiate Honors Councilでは、そこでの学生 (student)、教育 (education)、カリキュラム (curriculum) 等に対して、それぞれHonors student, Honors educationなどとHonorsを冠した名詞を用いている。一方、有本ら (2007) は、Honors degreeに対して、優等学位という訳語を示している。さらに、筆者の一人と杭州師範大学叶林助教授の調査によると、中国杭州には、アメリカのHonors collegeをモデルした浙江大学の竺可桢学院が運営されている。これらの文献・調査情報を照合するに、Honors collegeには、優等学院 (または優等教育院) という日本語訳が適切と思われる¹⁾。また、Honors program, Honors student, Honors education, Honors curriculumなどの用語も頻出するが、それぞれ、優等プログラム、優等学生、優等教育、優等カリキュラムなどと訳するのが自然であろう²⁾。

次に、本研究で学生に提示した教育組織として、既述の浙江大学の竺可桢学院を一部参考にした。これを用いた理由は、主に、同学院を直接調査する機会が得られ、そこでの優等教育に関するかなり詳細な情報が得られたことによる。アメリカでのHonors college/programは、実際の運用において、内容が多岐に渡ることが知られている。例えば、優等プログラムの領域として、先端的研究力の強化 (Ashby-Martin, 2007; Buckner, 2007) や工学技術 (Giazioni, 2007) に関するプログラムを提供する大学がある一方で、人類学 (Lovata R.T., 2007)、芸術 (Register *et al.* 2007)、大学イベント (Wilson, 2007)、社会貢献 (Parker, 2007)、インターン、コミュニティ形成 (Carnicom *et al.*, 2007) などが報じられており、必ずしも科学技術に特化した企画とはいえないようだ。ただし、優等企画に多様性が見られる中で、優等学生を全体の1割未満程度の範囲で選別し、特別な教育プログラムを与えるという点は、アメリカのHonors college/programのみならず、竺可桢学院にも共通することである。

竺可桢学院の教育企画の概略を述べると、入学試験の成績でトップの5~8%の学生に、優等教育として、2年間所定の教育プログラムを受けさせている。非常に高度な内容の教育プログラムであるため、成績不良となる学生もあり、その場合は、一般の学生と同じクラスで受講させるとともに、その人数分だけ新たに学生を募集している。理系 (数学、物理等)、工系 (工学一般)、文系 (言語、管理、法律、歴史等) の3分野を用意し、その2年間のうちに専門領域を定めたあと、3年目から一般の学生に合流して各専門を極めるという方法を採用している。したがって、先端研究への参加体験よりも、基礎学力を重視した中国版Honors collegeと見ることができよう。また、海外派遣、奨学金、寮生活などに対しても、一般学生よりも優遇する措置を採用している。

3. 研究方法

本研究におけるアンケート回答者は、教育学を専門とする教育学部生を対象とした。研究方法として、回答者には、当該教育組織への所属にかかる選別法、学生寮、奨学金の扱いなどを、前述の竺可楨学院の例を参考にして、優等学院³⁾のモデルを提示した。そして、回答者にとってほとんど初めての質問内容と思われることを考慮して、つぎの方法を採った。

- ①「優等学院」のモデルの特徴を簡条書きに示し、各項目に対して、否定・中立・肯定の区別などを意識して自由記述のレポート（1,500-2,500字）として書いてもらう。
- ②そのレポートを評価するため、第三者に読んでもらい、否定・肯定が読み取れるかどうかを多肢選択式アンケートで回答してもらう。
- ③②のアンケートを多変量解析し、教育学部生のイメージを抽出する。

このうち、①については、アンケートには、表1の最左欄に示す1-12の項目としてこの順に明記し、また、これらの処遇が学内外に公開されているとの前提を設けた。さらに、項目0のトータルとしての評価を加え、13個の項目に対して5段階（1. 否定的 2. やや否定的 3. 不定 4. やや肯定的 5. 肯定的）で各レポートを評価するようにした。また、一つのレポートから各項目に対する意見が読み取れるか否かも質問している。そして、「読み取れない」という場合は、既述の5段階評価に対しては「3. 不定」に回答するようにしている。

さらに、上記13項目のほかに、表2の4項目を加え、各意識がレポートから読み取れるか否かも二者択一で質問している。

回答者には、項目1-12による教育組織のイメージ化と評価を容易にするため、プラス意識とマイナス意識を下記のように例示した。

・積極的意識

- 国際的に通用する卒業生が生まれる
- 実力者が勝つのは自然な成り行きだ
- 日本が活性化する
- 科学技術的な競争力がつく
- リーダー不在社会の解決に繋がる
- 学生同士が切磋琢磨する

・消極的意識

- 平等の原則に反する
- 格差を助長する
- 学内が不穏当になる
- 一般学生のためにならない
- 学内に設ける必要はない
- 悪名高きエリート教育の復活だ

4. 回答分析 I —基礎統計—

前節の内容のレポート課題を、広島大学教育学部3年の日本人学生24名に2007年6月に提示し、1週間ほどの期限内にてそのレポートを回収した。レポートの評価者としては、27名の日本人学生（理学系2名、工学系9名、生物生産系2名、教育系8名、総合科学系2名、文学系2名、法学系2名）に依頼した。領域が広範囲にまたがっているが、一つのレポートから所定の事柄が読み取れるか否かという課題であるので、一定の日本語力を持っていれば専門領域による大きな差異はないと判断した。

表1 アンケート項目と基礎統計量など

(a)アンケート項目	(b)基礎統計量		(c)検定		(d)レポート数		
	平均値 \bar{a}	標準偏差	t 値	有意確率	有意差あり ($\alpha < 0.5$)	有意差なし	有意差あり ($\alpha > 0.5$)
0. この特別措置の全体的な賛否。	0.40	0.34	-1.40	0.176	12	3	9
1. 入学試験の成績に基づいて、上位の数%を優良学生と認定する。	*0.31	0.28	-3.31	0.003	16	4	4
2. 優良学生のための特別な教育組織を作る。	*0.40	0.22	-2.20	0.038	12	8	4
3. その教育組織には選別された優良教員が教育に当たる。	0.41	0.22	-2.00	0.057	13	5	6
4. 学生は少人数で、希望する専門の優良教員の指導を受けることができる。	0.48	0.16	-0.48	0.635	7	12	5
5. その教育組織では、優良学生のための厳しい教育プログラムを準備する。	*0.39	0.18	-3.17	0.004	12	8	4
6. 在籍年数は、一般学生と同様、原則4年とする。	0.55	0.14	1.61	0.121	1	19	4
7. 卒業では、一般学生とは異なる、いわば上位格の証書が渡される。	0.51	0.20	0.19	0.853	4	15	5
8. 途中で成績不良と評価された学生は、一般学生の教育プログラムに回される。空き定員には、一般学生から新たに募集する。	0.50	0.27	-0.01	0.989	11	3	10
9. 奨学金の面では、優良学生は一般学生よりも優遇されている。	0.57	0.24	1.48	0.154	4	11	9
10. 優良学生の授業料は、一般学生と同じである。	0.52	0.18	0.63	0.533	3	17	4
11. 優良学生は、一般学生と同じ費用で、優良学生だけの特別な寮に入所できる。	*0.25	0.24	-5.15	0.000	13	10	1
12. 優良学生は、卒業後、優良学生だけの同窓会に入会することができる。	*0.32	0.23	-3.96	0.001	12	11	1

注：アンケートでは、「優等」の代わりに「優良」を用いている。前節の趣旨から「優等」が適切と思われるが、アンケートでは回答者にとって聞き慣れない用語は相応しいとはいえず、敢えて「優良」を用いている。

評価者には1室に集まって24個のレポートを読んでもらい、それぞれについて前節の要領で回答してもらった。回答時間は特に制限を設けていないが、1時間～1時間30分ほどで終了している。

表1で「(b)基礎統計量」は、全レポートに対する全回答者の回答値の平均値 a と標準偏差である。このうち、 a は、1. (否定的)～5. (肯定的)の数値を0～1に規格化(1→0.0, 2→0.25, 3→0.50, 4→0.75, 5→1.0)して平均したものである。「(c)検定」は、「母集団の平均値が0.5である」という帰無仮説を検定するための t 値と有意確率を求めたものである。有意確率 p について、 $p < 0.05$ となる項目の平均値 a の値には、アスタリスクを付している。これらは、項目1, 2, 5, 11, 12の5項目であり、なおかつ、いずれもその平均値 a について、 $a < 0.5$ であることがわかる。すなわち、これら5項目に対しては、消極的であることが窺える。

また、「(d)レポート数」は、各レポートについて回答の規格化平均値 a を求め、「母集団の平均値が0.5である」という帰無仮説に対して有意差検定を行ったものである。そして、「有意差あり($a < 0.5$)」「有意差なし」「有意差あり($a > 0.5$)」に該当するレポート数を記述している。

この「レポート数」の統計結果から、項目1～12の中で、「(c)統計」で有意とならなかったもののうち、「(d)レポート数」の「有意差なし」のレポート数が比較的少ないものに着目してみる。ちなみに、全体の1/3すなわち8未満となるものは、項目3「その教育組織には選別された優良教員が教育に当たる。」と項目8「途中で成績不良と評価された学生は、一般学生の教育プログラムに回される。空き定員には、一般学生から新たに募集する。」の2項目である。これらは、全データの検定では、母集団の平均値が0.5という帰無仮説が採択されているものの、評価者によって意見が2つに分かれている項目といえる。いずれの項目も、一般学生と優等学生の関係性に対するイメージと思われる。要するに一般学生との格差の問題である。優秀とはいえない学生は一般学生のカテゴリーに入る可能性が高いから、回答者の学力との関係があるかもしれない。

表2 補足的項目 (%)

アンケート項目	読み取れない	読み取れる
13.「この特別措置では、人格的な養成(注)も必要である」との意識	80.2	19.8
14.「優良学生の認定の仕方をよく考える必要がある」との意識	37.0	63.0
15.「高度な学力だけに偏った人間になってしまう」との意識	85.3	15.7
16.「一般学生との格差・差別問題をよく考える必要がある」との意識	28.1	71.9

注：社会奉仕の精神，知の社会的還元精神など。

前節で述べた項目13～16に対しては、表2内に示した統計結果が得られている。このうち、項目13と15では当該の意識が比較的「読み取れなく」、項目14と16では同じく「読み取れる」ということがわかる。特に、項目16が「読み取れる」割合が最も高く、多くの回答者に、先に述べた一般学生との格差意識が存在していることが分かる。また、項目14は優良学生の認定の仕方に関するものであり、項目1に直接関連する。つまり、入試成績に基づいた機械的な判断に対する懸念と推察される。

一方、項目13と15は、共に、教育プログラムの養成の対象とする資質の内容に関するものである。回答結果からは、これらに対する関心が高いとはいえない。2節ではアメリカにおける優等プログラムの多様性を述べたが、どのようなプログラムを用意するかは、優等学生の将来的イメージをどう設定するかという課題との関連において非常に重要と思われる。

5. 回答分析—多変量解析—

表1に示した項目1-12の回答に対し、因子分析を行った⁴⁾。その結果を表3に示す。各軸において太線で囲ったものは、因子負荷量が0.5以上の数値である。それらと項目内容を比較すると、各軸は、「抽出された軸」に掲げた因子概念で特徴づけられる。すなわち、第Ⅰ軸は、項目3, 2, 4, 5で特徴づける。これらは、当該教育組織における教育の進め方を表しているもので、「指導体制」とした。第Ⅱ軸は、項目9, 7で特徴づける。奨学金における優遇措置や卒業時の「格の高い学位」を表しているもので、「目に見える利得」とした。第Ⅲ軸は、項目11, 12で特徴づける。優等学生だけでコミュニティを作るきっかけを与える企画であるので「優等コミュニティ」とした。第Ⅳ軸は、項目10, 6で特徴づける。授業料と標準の在籍年数に関する（優等学生と一般学生の）同一性であるので、「無格差」とした。ただし、これら2つの項目は比較の対象が異なるので、「無格差」の解釈は難しい。第Ⅴ軸は、項目8, 1で特徴づける。入籍や籍の離脱の認定に関するものであるので、「在籍・離籍認定法」とした。

また、5つの軸に対する分散の寄与率が71.9%と2/3を超えていることがわかる。つまり、当該教育組織に対する学生のイメージ構造がある程度明確と言え、類似の教育組織の企画を図る際のキーワードになるものと思われる。

次に、表3の5つの軸に対する因子得点を独立変数とし、表1の項目0の回答値を従属変数とした回帰分析を行った。つまり、当該教育組織に対するトータルとしての積極性がどの因子概念に回帰するかの調査である。その結果を表4に示す。

この結果より、従属変数であるトータルとしての積極性が、すべての軸の因子得点に有意に回帰している。また、これら5つの軸の組み合わせで、従属変数の分散の44.5%が説明されることがわかる。そして、当該教育組織の「指導体制」、「目に見える利得」の在り方、(入試に基づいた)在籍や(在籍中の成績に基づいた)離籍に関するその「認定法」に対する積極性が高いほど、トータルとしての積極性が高くなるという正の相関があることがわかる。

これに対して、「Ⅲ. 優等コミュニティ」については、標準偏回帰係数が負であることから、負の相関関係となっていることがわかる。先に、「Ⅳ. 無格差」の解釈が難しい旨述べたが、これらを合わせて考えると、学生間の格差とトータルとしての積極性の関係については、本研究の結果からは結論が出しにくい。

表3 因子分析

アンケート項目	抽出された軸				
	I. 指導体制	II. 目に見える利得	III. 優等コミュニティ	IV. 無格差	V. 在籍・離籍認定法
3. その教育組織には...	0.85	0.12	-0.11	0.12	0.04
2. 優良学生のための特別な教育組織...	0.79	0.08	0.19	0.12	-0.07
4. 学生は少人数で、希望する専門の...	0.67	0.29	-0.14	0.17	0.21
5. その教育組織では、優良学生の...	0.66	-0.13	0.15	-0.18	0.27
9. 奨学金の面では、優良学生は一般...	0.12	0.83	0.10	0.08	0.11
7. 卒業では、一般学生とは異なる...	0.10	0.82	0.04	-0.15	-0.26
11. 優良学生は、一般学生と同じ費用...	0.06	0.03	0.89	-0.09	-0.12
12. 優良学生は、卒業後、優良学生...	0.01	0.10	0.86	-0.126	0.25
10. 優良学生の授業料は、一般学生...	-0.00	0.01	-0.08	0.83	0.01
6. 在籍年数は、一般学生と同様...	0.18	-0.03	-0.12	0.82	-0.03
8. 途中で成績不良と評価された学生...	0.20	-0.18	0.10	-0.13	0.80
1. 入学試験の成績に基づいて、上位...	0.07	0.47	-0.04	0.35	0.58
固有値	2.33	1.74	1.67	1.64	1.23
累積寄与率 (%)	19.4	33.9	47.8	61.5	71.9
回転法：Kaiser の正規化を伴わないバリマックス法					

表4 重回帰分析

独立変数	標準偏回帰係数 (β)	t
I. 指導体制	0.23(0.35)	7.90*
II. 目に見える利得	0.33(0.51)	11.36*
III. 優等コミュニティ	-0.18(-0.28)	-6.16*
IV. 無格差	0.23(0.35)	7.87*
V. 在籍・離籍認定法	0.45(0.68)	15.21*
F 値	104.57*	
R ²	0.449	
自由度調整済 R ²	0.445	

*p<0.001

6. おわりに

本研究では、優等学生に対する特別措置としての「優等学院」を取り上げ、それに対する教育学部生のイメージ調査を行った。ここでは、中国で運営されている優等学院の実例を一つの参考にして、一つのモデルを構成した。それを被験者に提示し、提示モデルに対する印象を自由記述式にレポートとして回答を求めた。そして、そのレポートを別の被験者が評価者として多肢選択式にアンケート回答し、その回答情報を統計処理した。その結果、「指導体制」「目に見える利得」「優等コミュニティ」など5つの因子が抽出されること、それらの中でも「優等コミュニティ」にかかわる項目である優等学生だけの学生寮や同窓会の設定には消極的であること、などをイメージを持っていることなどを明らかにした。

【注】

- 1) 検索エンジン「Google日本」で「優等学院」を検索すると、最初の200件の中にはこの日本語は存在しない(2007.10.現在)。「優等教育院」についても同様であった(「優等学位」は多数見られる)。
- 2) 「優等生」という普通名詞に関し、広辞苑からは、多少皮肉を込めた概念を有する場合があることが推察される(「エリート教育」についても同様と思われる)。一般に、キーワードとも呼ぶべき主要な言葉自体に当初から好感・嫌悪に関する意識的バイアスが想定される場合、論文中での使用は原則として好ましいとは思われない。このような理由を含め、「優等生」、「エリート教育」の代わりに、それぞれ「優等学生」、「優等教育」を用いている。
- 3) アンケートの文面では「優等学院」なる用語は用いていない。
- 4) 本研究では、24の評価レポートを27人の評価者が評価しており、処理データ数は24*27である。つまり、通常の因子分析からすれば、処理データ対象が変則的である。そこで、これとは別に各レポートに対する27人の評価者の平均値を処理データとするという方法も採った。したがって、この場合は、処理データ数が24と少なくなる。しかし、いずれの場合も、ほぼ同様の抽出因子や解釈が得られることが分かっている。

【参考文献】

- 有本章(代表)(2007)『学位に関するベンチマーク・ステートメント—英国・高等教育水準審査機関(QAA)の学科目別報告—』広島大学高等教育研究開発センター。
- 北垣郁雄・赤堀侃司編著(2007)『科学技術時代の教育』ミネルヴァ書房。
- 名古屋商科大学, 2007.9現在, <http://nucb.jp/index.php?ID=488>
- 日本工業大学, 2007.9現在, <http://www.nit.ac.jp/campuslife/shougaku.html>
- 広島大学, 2007.9現在, http://home.hiroshima-u.ac.jp/~houki/reiki/reiki_honbun/ax89204401.html

東北大学, 2007.9現在, <http://www.iiare.tohoku.ac.jp/education/student.html>

- Digby, J. (2005) Peterson's smart choice, Peterson's honors programs & colleges, Lawrenceville: Thomson Peterson's.
- Lovata, R. T. (2007) 'Learning a Practice Versus Learning to Be a Practitioner: Teaching Archaeology in an Honors Context', *Honors In Practice, National Collegiate Honors Council 3*, pp.15-27.
- Register, B. P., Bullington, R, and Thomas, A. J. (2007) 'Teaching Arts and Honors: Four Successful Syllabi,' *Honors In Practice, National Collegiate Honors Council 3*, pp.29-52.
- Parker, T. A. (2007) 'Service Learning in the Honors Composition Classroom: What Difference Does It Make?,' *Honors In Practice, National Collegiate Honors Council 3*, pp.53-59.
- Wilson, M. A., Blakley, D. T., Leciejewski, A. K., Sams, L. M. and Surber, A. S., (2007) 'Teaching an Honors Course Tied to a Large University Event,' *Honors In Practice, National Collegiate Honors Council 3*, pp.69-75.
- Giazzoni, J. (2007) 'The Fessenden Honors in Engineering Program,' *Honors In Practice, National Collegiate Honors Council 3*, pp.79-82.
- Carnicom, S., Harris, W. K., Draude, B., McDaniel, S., and Mathis, M. P. (2007) '“BBQ with Profs” and the Development of collegial Associations', *Honors In Practice, National Collegiate Honors Council 3*, pp.129-137.
- Ashby-Martin, C. (2007) 'Multi-Level Benefits fo Using Research Journals in Honors,' *Honors In Practice, National Collegiate Honors Council 3*, pp.141-148.
- Buckner, B. E. (2007) 'Ten Steps to Honors Publication: How Students Can Prepare Their Honors Work for Publication,' *Honors In Practice, National Collegiate Honors Council 3*, pp.149-155.

An Image Survey of the Education Major Student on Honors Colleges and the Analysis

Ikuo KITAGAKI*

Donglin LI**

Nobuaki FUJII***

A system which supports students who demonstrate high ability would seem to be beneficial. In a global era, such support could encourage students' motivation for learning and their competitive awareness. Several examples of such systems exist in Japan: Hiroshima University, Nagoya Commercial University, Nihon Institute of Technology. In some countries, universities have established educational structures that organize special educational programs for students who demonstrate high ability. Although, such an educational organization is rare in Japan, it is important to determine whether this type of educational provision would allow fostering of international human resources to be facilitated.

To this end, a project has been undertaken to establish a virtual educational organization for outstanding (honors) students and to survey the responses of students. We here discuss the contents of the questionnaire, analyze the answers, extract an image structure, and review the conclusions. The results are seen as contributing to creating basic data for consideration of special treatment of Japanese honors students in the future.

* Professor, R. I. H. E., Hiroshima University

** Research Assistant, R. I. H. E., Hiroshima University

*** Lecturer, Hiroshima Institute of Technology